NO.103　2008.01.31

＊「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう

＜クリスマスカードを受け取った
ジトーミル市立小児病院の子ども達＞

「人々を助けたい」という心からの願い

皆さんに対し、友情をこめてクリスマスと新年のお祝いを申し上げる機会を得て、これにまさる喜びはありません！

種々の困難にもかかわらず、今年もいくつかの支援プログラムを、特に皆さんが 17 年にわたって常にサポートしてこられたナロジチ地区で、実現できました。

私たちの共同の人道的活動と、人々を助けたいという心からの願いが、人々のためになることを続けていこうという意欲と新たな活力を与えてくれます。

チェルノブイリが時とともに遠ざかれば遠ざかるほど、ますます多くの問題が生じてきます。それが人生の悲しむべき論理なのです。そのことを理解して、私たちは皆さんとともに努力を倍加し、チェルノブイリ後の未来を信じられなくなった人たちに、明るい気持ちを抱かせなければなりません。自らの行いによって、人道支援の新たな賛同者を仲間に引き入れることで、ご一緒にその未来を築いていけるものと信じています。

心より祝日のお祝いを申し上げ、ご健康と長寿、すべてのご活動におけるご成功をお祈りします。深い敬意を込めて

「チェルノブイリの人質たち」基金運営委員
V.コセンコ　G.パリヴォダ　S コルジュ　V.コルジュ　A.グサク　B.チュマク
V.キリチャンスキー　E.ドンチェヴァ　2007 年 12 月 24 日

〒466－0822　名古屋市昭和区楽園町 137　1－10
チェルノブイリ救援・中部　代表：小牧　崇
郵便振替：00880－7－108610
ＴＥＬ/ＦＡＸ：052－836－1073（月･水･金 10:00 ～ 17:00）
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

ミルクキャンペーンの報告とお礼

遅ればせながら、新年あけましておめでとうございます。寒に入り、文字通り寒さが一段と厳しくなり、春の訪れが待ち遠しい毎日ですが、皆様にはますますご壮健のことと拝察いたします。

早速ですが、ミルクキャンペーンへの寄付金の統計をお知らせします。キャンペーンを開始した昨年 10 月～1 月 25 日現在、ミルク代として 896,711 円（111 件）、それに **4 月からの寄付金を合計して、981,211 円（140 件）のご支援**をいただきました。ご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。

なお、現地へ送るミルク代は『ミルク代へ』と費用指定された寄付金だけでまかなわれています。これらの寄付金は、３月にチェルノブイリホステージ基金を通して、小児病院・孤児院の赤ちゃんへ送られます。いただいたご支援により、チェルノブイリ被災児童・貧困家庭の子ども・入院患児に対して、しかるべく栄養を与えることができ、そのことは児童人口の健康を質的に著しく向上させることができます。

ミルクキャンペーンは、今後も継続して行っていきます。これからも、暖かいご支援をよろしくお願いします。

寒さ厳しき折、健やかにお過ごしになられますよう心よりお祈り申し上げます。　（田口）

クリスマスカードキャンペーンの報告とお礼

皆様から届けられたクリスマスカードは、ウクライナ正教のクリスマスである１月７日までに現地に間に合うようにと、昨年 12 月 19 日に、現地に向けて発送しました。25 日に現地に到着、**27 日には子ども達に手渡され、その様子は現地の全国放送にて朝と夕方のニュースで放送されました。**

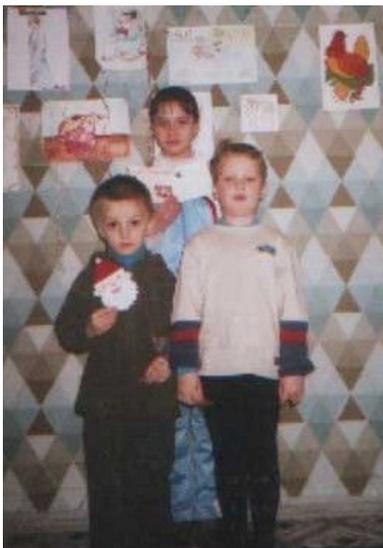
今年度ウクライナに届けられた**クリスマスカードは、2,265 通**と、昨年度よりも約 500 通も多く集まりました。数にも驚きましたが、クリスマスカードに込められた皆様からの温かい想いを拝見し、私たちまで元気づけられました。この“心のプレゼント”が、ウクライナの子ども達の心の支えとなることを考えると、発送作業をしながらとてもわくわくしました。

チェルノブイリホステージ基金のキリチャンスキー氏より、お礼状をいただきました。（次ページを参照してください。）

クリスマスカードに添えられた手紙の中に、**「このキャンペーンを通じて、チェルノブイリ原発について話し合い、チェルノブイリに想いを馳せました」**という言葉がありました。そのことが、何より嬉しいことのように思います。最後に、このキャンペーンにご参加・ご協力くださった皆様、広報に協力してくださったメディアの皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。

そしてまた来年も、ご協力をお願いいたします。　（澤木）

親愛なる
日本の友人の皆さん！

＜アートセローからのクリスマスの絵画＞
＊事務所の壁に貼ってある絵画をスキャンしました。

貼り絵をしたり、絵を描いたり、文を書いたり、鶴などの折り紙を折ったりして、クリスマス・カードを作ってくれた皆さんのひとりひとりにお便りできないことに対して、深くお詫び申し上げたいと思います。でも、すぐに付け加えたいのは、**カードを受け取った全員――ジトーミル州立・市立小児病院の患児たち、ナロジチ町の「お陽さま幼稚園」の園児たち、ナロジチ地区ボロトヌィツャ村の小中一貫学校の生徒たち（この学校には、日本についての展示コーナーがあり、そこに新しいカードが加わりました）、行政からのお正月プレゼントといっしょにカードを受け取った[家計が苦しく、社会保障の対象になっている]子だくさんの家族の子たち、絵画教室「アート・セロー」の生徒たち、ジトーミル美術学校の生徒たち、[キリチャンスキー氏が非常勤講師をしている]ジトーミル国立大学ジャーナリズム学部の学生たち、ジトーミル第 23 番学校の生徒たち（生徒の一人の親が TV 局の記者なので、この学校で撮影されたニュースの映像が全国で放送されました）に代わって、心から感謝の気持ちをお伝えしたい**ということです。

こちらの子どもたちの中で、返事を書く子もいるだろうと期待していますが、約束とその実行の間には大きな落差があるのが常ですから、皆さんのカードを渡された人たちからの感謝の言葉が届くのに先立って、私はあえて彼らに代わってお返事を書くことにしました。

例年のクリスマス・カードは、すでに人道支援の一部として定着しました。というのも、人道支援はお金の提供という形をとるばかりでなく、優しい言葉や友好関係、また単に、遠い日本の子どもが自分のことを思い、忘れずにいて、自分の健康を願い、元気でいてほしいと思っているのを、ウクライナの子どもが確実に知っているということにも表れているのですから。

まさにこのような善意のキャンペーンが、私たち、慈善基金「チェルノブイリの人質たち」のメンバーに、自分の疲れや苦労・当地の人々の無関心・支援をしようと思えばできるのに、自分のことしか考えていないので支援をしない裕福な人たち…のことを忘れさせ、日々の困難な、しかし必要不可欠の仕事を続けさせてくれるのです。

そのことに対して、お礼を申し上げます！　励ましていただいてありがとう！　皆さんと力を合わせて、チェルノブイリ原発事故の後遺症に必ずや打ち克ち、ついにはそれを一掃できるものと思っています。すべての方々への深い尊敬を込めて

2008 年 1 月 9 日
「チェルノブイリの人質たち」基金理事　V.キリチャンスキー

「ふぅ…。やっと、ここまでたどり着いたなぁ…」

（神谷俊尚）

注文書のFax送信後の実感です。バイオデーィゼル燃料（BDF）製造装置の検討は、「菜の花プロジェクト」スタート以来、昨年８月までは、現地調査も含め順調に推移していました。製造実績のあるＡ社と設計契約をし、それに基づき製造依頼の予定でしたが、設計の遅れ・原材料費の高騰による製品価格の上昇・納期の不確実性等が表面化し、９月下旬に話合いで契約を解除しました。

１０月以降、急遽国内外のBDF製造装置を調査し、希望する製造能力・操作性・メンテナンス等を検討の結果、国産機の採用が最善の方法と結論を出しました。国内メーカー4社から見積りを徴集し、見学可能な３社を、河田・原両氏が訪問（ポレーシェNo.102 p7　BDF製造装置メーカー訪問記参照）し、実機の見学・説明を受け、１１月下旬の選定委員会で２社に絞り、１２月運営委員会に計り、現地ホステージ基金にカタログ・性能比較表を送り、現地関係者に選定協議をしてもらいました。

１２月２６日　現地駐在員竹内氏より、「㈱エムエスディー（以下MSD社）製品が良いので、ウクライナ国の操業許可を得るため、至急仕様書や運転マニュアルを送付願いたい。」との現地決定メールが届き、運営委員会の意見とも一致したので、直ちに発注作業を行いました。

①　メーカー・機種　　㈱MSD（本社　山形県天童市）　BDK-Ⅱ
②　製造能力　3.5時間稼動で200L（1日２回転で400L製造可能）
③　操作性　条件設定後は、タッチパネルで半自動式

操作指導は、現地でBDF製造装置設置時に、メーカー社員が立会い指導をする予定。製造された油を使用し、自家発電で必要電力を賄う為に、別途、自家発電機も発注しました。

２月上旬、河田・原・小牧３氏が現地訪問し、BDF製造装置設置の最終打合せ・操作責任者の確認・バイオガス（BG）製造装置建設 等の細部打ち合わせ後、３月にBDF製造装置・付属品・発電機・その他支援品の船積み、６月下旬に現地でBDF製造装置据付・スタツアメンバーも参加して「火入れ式」の予定で進んでいます。

いよいよ本番！わくわくしながらも、気を引き締めてBDF＆BG（装置）の本格稼動を迎えたいと思います。ナロジチの大地で青々と育つ、**「安全で新鮮な作物」**を夢見ながら…。

<2008年スタツア情報（第３弾）>　パスポートの準備を始めましょう!!

1	6/25（水）	中部国際空港から　出発 フィンランド（ヘルシンキ）着	ﾍﾙｼﾝｷ（泊）
2	6/26（木）	ウクライナ（キエフ）　到着	ｼﾞﾄｰﾐﾙ（泊）
3 ↓ 7	6/27（金） ↓ 7/01（火）	①　菜の花畑・BDF＆BDプラント　視察 ②　30ｷﾛ圏内（チェルノブイリ原発・廃墟の街プリピャチ他）見学 ③　ホステージ基金（カウンターパート）との会談 ④　ジトーミル農業生態学大学（共同研究者）訪問 ⑤　ジトール市内の慈善団体（支援団体）の紹介	ｺｰﾗｽﾃﾝ（泊） ｼﾞﾄｰﾐﾙ（泊）
8	7/02（水）	キエフ市内（チェルノブイリ博物館　見学）	ｷｴﾌ（泊）
9	7/03（木）	ウクライナ（キエフ）　出発	ﾍﾙｼﾝｷ（泊）
10	7/04（金）	フィンランド（ヘルシンキ）着	機中（泊）
11	7/05（土）	中部国際空港　帰着	

企画：「チェルノブイリ救援・中部」　取扱い：「ユーラシア東海（手配旅行）」

現在、上記の１１日間の日程で計画中です。参加費用は、およそ３０万円を予定していますが、正確な航空運賃は、2～3月下旬までに発表されるとのことです。次号で、確定した費用をお知らせします。申し込み方法も次号でお知らせします。パスポートの有効期限を確認しておいてくださいね。（美）

4月12日、国際センターで「チェルノブイリ22周年救援企画」を行います。

先日、「人は忘れるから生きていけるんだ、忘却バンザイ」というキャッチフレーズをみつけて、「どきっ」としました。忘れるとか忘却とか言う語に触れると、反射的に「チェルノブイリ」をぎゅっと抱きしめたくなります。

救援活動を、使命感だとか責任だとか愛だとか言う人がありますが、私は、自分の心の中を覗き込んでも、あるのは責任感でも愛でも使命感でもなくて、ただ「したいから」という思いだけがあります。理由付けも理論付けもできないのですが。

･･･そして今年もまた、4月が来ます。アースデイやら平和映画祭やら、いろいろあるけれど、やっぱり4月は特に、何よりも「チェルノブイリ」。いろいろな都合で12日です。

決心が遅かったため、ホール選びも思うようにいかなくて、キャパ250の国際センター別棟ホール。小さいけれど、「溢れるほどの人々に来て欲しい」と思っています。**バンドゥーラ弾き語りのナターシャ・グジーと、広河隆一さん**の組み合わせです。たどたどしい日本語で、客席の暗がりに向かって、必死で「私たちのような子どもを、もうこれ以上作らないでください」と訴えていたナターシャも、見違えるようにおとなになりました。幼友達の死を見つめ続けておとなになったナターシャの非核の訴えは、誰の胸にも沁みるように響きます。

広河さんにはチェルノブイリだけでなく、核汚染の深まり続ける地球の現実を語ってもらうつもりです。11時からの写真展は無料開放、ミニバザーもします。このささやかな救援キャンペーンへの「チェル救」さんのご協力に、感謝しています。

みなさま!! 4月12日（土）は、是非国際センター別棟ホールへ来てくださいね。（詳しくは、同封のチラシを参照してください）

（宮西）

菜の花通信 *今号より、ナロジチの人々との文通を始めます。読者の皆さんもぜひご参加ください。

ナロジチ地区行政長サブリュクさんへ

私がナロジチを訪れてから3年以上経ちました。その頃の私たちのナロジチの親しき友人たちは、病院のスタッフ・消防署員・行政の方などに限られていました。しかしこの間「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」が立ち上がり、チェル救のメンバーが、一年に何度も何人も訪れるようになり、親しき友人たちの輪が大きくなっています。

遠いはずのナロジチが、まるで隣町であるかのような気分です。

昨年9月に訪れたメンバーが、初めてあなたにお会いしたときの印象は、「気さくなおじさん」。これから長いお付き合いとなるあなたが、気さくな方とわかり、私たちはどれほど安堵したことでしょう。たとえ大きな問題が発生することがあったとしても、明るさやユーモアを兼ね備えた人ならば、きっと一緒に解決の糸口を探してくれそうな気がします。

ナロジチでは、多くの人がつつましく生活し、そして病気に苦しんでいると聞きました。原発事故が風化しているなかで、ひっそりと暮らしている人々に寄り添っていらっしゃるのですね。

今年は、昨年以上に多くの日本人がお邪魔します。ここはひとつ、よろしくお取り計らいを…。

ところで、不躾ですがひとつお願いがあります。ナロジチの皆さんと日本の皆さんの間でお手紙の交換**「菜の花通信」**をしてみませんか？　どうぞナロジチ地区の皆さんをご紹介ください。この「菜の花通信」は、ポレーシェ誌上で、日本の皆さんに紹介します。お手紙を待っています。

（市原佳代）

2月代表団 出発!! （小牧 崇）

2月2日（土）	ジトーミル入り
3日（日）	ホステージ基金と08年度予算等について協議
4日（月）	農業大学で打ち合わせ
5日（火）	午前　昨日に続き大学で打ち合わせ。 午後　資材店に寄りながらナロジチへ移動。
6日（水） ～8日（金）	ナロジチ滞在。現場の確認。作業担当者の決定および打ち合わせ。水道、製材、生コン等の業者と打ち合わせ。などなど
9日（土）	ナロジチ出発

このポレーシェがお手元に届く頃、河田さん原さんとともにウクライナにいます。手持ちの資料によると、2月の平均気温、キエフは-4.2℃、軽井沢が-3.9℃。私と原さんの住む伊那の寒さは「軽井沢並み」ですから普段の服装で気軽（？）に出かけます。ナロジチの凍てついた大地の下で、昨秋播かれた菜種は、春の到来に向けて着々とエネルギーを蓄えているはず。その力が解き放たれて大地を黄色に染める６月は、私たちのバイオディーゼル燃料とバイオガスのミニプラントが、稼働を開始する時でもあります。昨年から具体的にスタートした「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」ですが、これから最大の山場を迎えます。今回のウクライナ行きは、そのために現地パートナーとの最終打ち合わせをすることが一番の課題。気軽に出かけるつもりですが、ついつい気合いが入ってしまいそうです。（日程は上の通り。）ウクライナでは、現在かなりの物価上昇が進行中。そんな中で、作業の段取りをつけるのは困難もあると思いますが、百戦錬磨の原さんのことですからどうにかこなしてくれるでしょう。しっかりサポートしたいと思っています。では、行ってきます！

バイオガス、今後の進め方 （原 富男）

ナロジチにおけるバイオガス製造装置の工事が目前に迫ってきました。バイオガスの工事前の進行状況は、①装置の設計図面と仕様書が出来上がり、②装置の配置図面と取扱説明書が間もなく出来上がるところです。この①と②を現地に送り、工事着工の許可を得なければなりません。住民の許可さえ得られれば、すぐ着工できるという国と違い、旧社会主義国というのは少し厄介なものです。許可のための書類作りは面倒なものですが、反面、その作業を通じて自分の中で曖昧だった知識が整理されることは、嬉しいことです。許可さえ得られれば、直ちに工事に入ることになります。工事の具体的な準備と打ち合わせのために、２月１日から11日までの予定で、再びウクライナに行くことになりました。

バイオガスにとってもバイオディーゼル燃料にとっても、一番大切なことは、現地で実際に装置を扱うことになる担当者の熱意です。特に、「個人の家の設備の場合は大事に扱うけれど、自分のものでない公共的な設備は大事にされない」ということがあり得ます。だから、担当者選びがそのプロジェクトの成否を左右するのだと思います。**今回の訪問では、①担当者の選考、②設置場所と建物の調査、③許認可条件の確認、④建物・水道・原料の供給についての契約、⑤工事協力会社との打ち合わせ、⑥資材の調達調査などを行う予定です。**

実際に工事に取り掛かるとなると、いろいろな問題が出てきそうです。例えば日本であれば、電話一つでコンクリートが生コン車で届けられますが、下手をしたら大量な生コンを手練で作ることになるかも知れません。今は、そんな手探り状態にあります。実際に、工事に入ってからまごつかないように、しっかり調べてくるつもりです。皆さんも、うまく行くように祈ってください。

バイオ燃料：ウクライナの展望

＊現地「タイヤ＋」誌に掲載された記事を紹介します。

ウクライナは、燃料資源の需要の 53%しか自給していない（ガスの必要量の 75%、原油と石油製品の 85%を輸入）。先進国では、常に価格の上昇し続ける石油を輸入に依存していることと、石油製品の使用に伴う顕著な生態学的危険性が刺激となって、オルタナティヴなエネルギー源の探索が熱心に行われている。ウクライナにとっても、バイオ燃料の生産力を増大させるべき時が来ている。このことに関して、**日本の市民団体「チェルノブイリ救援・中部」**が大きな寄与をしてくれるかもしれない。自分たちのプランとその目的について、同団体の運営委員の一人である**河田昌東氏**が本誌に語った。

Q.皆さんのプロジェクトの主目的について、話していただけますか。

A.プロジェクトの主な目的は、放射性物質によって汚染された土壌を、ナタネ栽培によって浄化することです。ナタネの放射性物質を吸着する性質を利用して、畑の土を浄化し、住民の内部被曝線量を減らすのです。同様に重要な目的は、バイオディーゼル燃料とバイオガスの生産です。ナタネの種子を搾った油を用いて、バイオディーゼル燃料を生産することです。放射性物質は水に溶け、ナタネ油には含まれません。残った油粕やバイオマスは、バイオガス製造装置の反応槽で発酵させられます。

Q.バイオ燃料の生産は、既存の工場で行われるのですか、それとも新たに工場を作る予定ですか？

A.ジトーミル州ナロジチ地区に新しい工場を作るつもりです。ウクライナ政府は、ナタネ栽培とエコロジー的にクリーンな燃料の生産のプログラムを作成しています。ですから、もちろん将来性はあります。

Q.農業政策省は、2009 年までにナタネの栽培面積は現在の 8 倍、150 万 ha（ウクライナの耕地面積の 5%）になり、バイオ燃料の原料の自給を予測しています。何が必要と考えられますか？

A.国家プログラムを参照して言えるのは、ウクライナでそのような規模のナタネ栽培は可能だということです。ウクライナのエネルギー問題の解決にも役立ち、エネルギー源としてのバイオ燃料は、エネルギー経済にとって大きな役割を果たす可能性があります。

Q.このような大型のプログラムによって、ウクライナはバイオ燃料生産の原料を自給し、さらにヨーロッパ諸国や世界に輸出できるでしょうか？

A.今日ウクライナは、主に輸出の目的でナタネを栽培しています（大部分はドイツ向け）。私たちの考えでは、自国のために原料を直接加工するためのプラントを増やす方が、ずっと有利です。しかも、環境負荷が少ないという顕著な利点もあります。

Q.ナタネの栽培は、どのような規模で行われる予定ですか？

A.現段階では、春播きと秋播きのナタネの実験的な栽培を、12ha の畑で行います。

バイオ燃料とバイオガス製造の問題は、小型の製造装置（日本製）を、2008 年 6 月末までにナロジチに設置する予定です。プロジェクトは今は実験段階ですが、その目的は、原料の栽培とバイオ燃料の製造というシステムの構築です。今後の私たちの活動は、地区の人々と地区行政の反応如何にかかっています。

Q.ウクライナ側の助力はありますか、それともすべて自力でやらなければならないのでしょうか？

A.実験は、ジトーミル市の国立農業・生態学大学と共同で行っています。ナロジチ地区は土地を提供、土地管理ステーションの職員が栽培を行っています。プロジェクトの資金は私たちが全額負担しています。私たちと農大、地区行政との間で契約が結ばれています。

河田氏の語った将来の展望が、ウクライナにとってユートピアにとどまるのでないことを期待するのみである。というのも、この展望は、バイオ燃料の生産によって石油製品の輸入が国の経済に与える圧迫を多少なりともやわらげ、その石油製品が生態系に与える影響を緩和するということを意味しているからである。これは何といっても、些細とはいえない成果ではないだろうか。　（聞き手：V.ストゥーパク。写真：I.ホムチュク）

素晴らしい子ども達の力

12 月 23 日、研修生の澤木さんと、静岡サレジオ小学校のクリスマス会に出席しました。この学校の子ども達は、10 年以上にわたって、学校ぐるみでチェルノブイリ被災者への支援活動を続けてくれています。午後 1 時から学園内のホールで始まったクリスマス会のメインイベントは、４年生全員が出演する創作オペレッタ「白鳥になった 11 人の王子」。

皆、臆することなく歌い、踊り、予想を超える素晴らしい発表でした。また５・６年生は、舞台装置・照明・音楽などでこれを支えています。後半の、６年生が担当したクリスマス・ページェントでは、子ども達全員の合唱も組み込まれ、まさに全校児童の参加によって創りあげられた会でした。その中で、私も、星の子活動リーダーの指示に従って壇上に上げられ、子ども達から 10 万円、保護者から５万円のチェルノブイリ救援金を預かってきました。この「星の子活動」という縦割りの福祉活動が、子ども達を鍛え上げ、会の運営を担う力をつけているのだろうと思いました。素晴らしい子ども達の力に圧倒されたクリスマス会も、３時に終了。暖かな気持ちもいただいて、学園を後にしました。

（小牧　崇）

よみがえれ！自転車再生計画

1 月 24・25 日と、**「(特活)アルシュ(自立を支援する会)」**から寄付していただいた中古自転車を、ナロジチ地区の診療所へ送るべく、「自転車再生計画」を実施しました。去年、同じ診療所に送った新車 11 台と、今回 12 台と合わせて、計 23 台を送ることになりました。

【（右）河田さんと自転車を磨く】

雨や風で大ダメージを負っている自転車を、新車同様に生まれ変わらせるべく、事務所内で作業を行いました。

外見はとってもきれいな自転車でしたが、チェーンを見て愕然。茶色くなったチェーンは錆び錆びで、全くもって動かない状態。そんな自転車と悪戦苦闘！

【（左）自転車を試運転中】

奮闘の末、錆びも取れ快適な自転車に早変わり！気持ちがイイ！なんと６速のギア付き。（田口）

「まだチェルノブイリのことを覚えてる人がいるんですか？」

［『ジトーミル州』2007.12.25 号掲載］
ヴラディーミル・キリチャンスキー（慈善基金「チェルノブイリの人質たち」理事）

ウクライナとベラルーシの国境の税関職員が発したこの言葉とともに、第 4 回国際会議「チェルノブイリ後の人間生態学」に参加するための、私のミンスクへの旅が始まった。

会議の主催者は、A.D.サハロフ記念国立生態学大学（ミンスク市）・ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故事後処理局・同国立医科大学小児疾患学部・ベラルーシの「チェルノブイリの子どもたち」委員会他であった。

今回、主催者たちは生態学の側面に重きを置いたが、結果としては、全てが汚染地域の住民の健康状態悪化を証し立てることになった。列挙された数字や事実が示しているのは、被災者や事故処理作業者の健康が悪化し、精神的な問題も加わっているということだった。チェルノブイリに関する国の予算、特に医療関係の予算は不充分である。

ゴーメリ州について報告され、ジトーミル州、特にナロジチ地区での状況にきわめて似通っていた。腫瘍罹病率の増加に大きな関心が向けられ、それは世界的な傾向である、とも言及された。例えばアメリカでは、ネヴァダ州での核実験の成果が、現在「収穫」を上げている。日本の学者たちは、「核爆発の 15～20 年後から腫瘍罹病率が急増するだろう」と警告した。アメリカでは、腫瘍罹病率が予測の 2 倍に達している。腫瘍罹患率の増加は、ベラルーシやウクライナでも認められている。

特に、学者や医師たちを憂慮させているのは、甲状腺疾患の状況である。この問題は国際的な資金援助を必要としていると訴えた。ベラルーシ・ウクライナ・ロシアは、団結して問題解決にあたるべきで、現段階では、効果的な治療や病気の予防に、力が注がれなければならない。

ロシア科学アカデミー神経生理学研究所のホロドヴァヤ氏の研究「チェルノブイリ事故の事後処理作業者の精神・神経の健康」によれば、14 年間、49 名の調査対象者の健康は悪化の一途をたどり、全員が 1 級または 2 級の障害者となった。事故処理作業者たちの免疫系は、一般人より 15 歳ほど「老化」し、脳についても、45 歳から 50 歳の人たちが多くの点で 60～65 歳の人を思わせ、しかも心臓血管系等の病気を束にして抱えている。残念なことに、この問題を研究しているウクライナの学者は、誰も参加していなかった。

会議での報告は、チェルノブイリの問題の全ての側面に関わっていた。チェルノブイリの問題は、時とともに増えていくばかりだと改めて強調し、3 国の政府と国際世論に対して、未来のためにチェルノブイリ問題解決の予算を増やすべきとのアピールを行った。

ロシア・ブリャンスク州議会のチェルノブイリ委員会フォードロフ氏の報告では、ジトーミル州に比べ、同州の受けた被害はずっと少ない。同州も国の助成を受けているが、2007 年～2010 年の「チェルノブイリ原発事故により被災した住民と土地のリハビリテーション」プログラムのため、州予算から資金を割くことができた。問題の種類は、我が州と同様、社会的支援、放射線測定、土地のリハビリテーション、ガス化、道路の建設と改修、健康診断、都市部・村落部の医療施設の機器購入、成人と児童の保養。連邦予算からも資金が得られ、合計 6,800 万ドル（3 億 4,000 万グリヴナ）をもってすれば、チェルノブイリ関連プログラムのために多くのことができる。

私がずっと考えていたのは、「もし、チェルノブイリの問題を避けて通ったり、黙殺したりすることを続けていれば、私たちみんながいったいどうなるのかということを、ウクライナの社会が未だに意識していない」ことだった。これが問題の一面である。もう一つの点は、運命の犠牲者であるかのような態度を取って、常に誰かの支援を待ち続けるのではなく、自ら何かをしなければならない、自らのため、自分の子ども達の、故郷の、そして祖国の未来のために、行動しなければならないのだ。

竹内さんのウクライナ便り

キエフでは、1月に入って一度零下十数℃の冷え込みがありましたが、その後は当地として高めの気温が続いており、雪が降ってはとけるという天気です。暮れに成立した新内閣のもと、ティモシェンコ首相の主導する新政策が進められつつありますが、その成果については改めて書くことにします。

12月10日朝、キエフ市内のプレジデント・ホテルで前日から開かれていた「第1回ウクライナバイオ燃料国際研究・ビジネスサミット」に行き、第2セクション（ビジネス部門）で午前中の報告5件を聞きました。このサミットは、USAID（アメリカ合衆国国際開発エージェンシー）の農業プログラムなどの主催で、ジトーミル農業・生態学大学のディードゥフ助教授が私に情報を送ってくれたものです。バイオ燃料の原価は石油製品より高いため、その普及には国の支援（税制優遇など）が不可欠であるにもかかわらず、ウクライナのバイオ燃料生産振興国家プログラム（2010年までに20ほどのバイオディーゼル燃料生産工場を建設する、など）が財政的裏付けを欠く非現実的なものであること、バイオ燃料の生産・販売に関連する法的基盤が整備されていないことは共通して指摘されていました。

一方、モンサント社のマーケティング担当者が、ウクライナでのナタネ生産の可能性について話したのはちょっと驚きでした。遺伝子組み換え作物の是非について、参加者の間で議論がありましたが、たしか11月から食品の遺伝子組み換え原料表示をするという法案が審議されていたにもかかわらず、結局採決されず、ウクライナでは遺伝子組み換え作物は野放し状態のようです。スーパーなどで売られている加工食品の中には、法定基準を満たしていない粗悪なものがまじっているということもしばしば指摘されており、国の消費者保護の施策や、消費者自身の団体形成、抗議・監視運動などはまだまだ立ち遅れているようです。

そのすぐ後の12月12日、ジトーミル市の文化会館のホールでの事故処理作業者記念の夕べに、「チェルノブイリの人質たち」基金のドンチェヴァ氏と参加してきました。昨年大統領令で制定された「事故処理作業者の日」は、チェルノブイリ4号炉上の「石棺」が完成した12月14日だそうですが、14日にはジトーミル州行政主催の行事があるということでした。行事の進行役を務めていたのは、「リクヴィダートル」基金代表のコヴァルチュク氏でしたが、「チェルノブイリの消防士たち」「チェルノブイリ障害者支援基金」「事故処理作業者の寡婦たち」「チェルノブイリ連盟」などの団体のメンバーも参加していました。ジトーミル市長（女性）と、市内2地区（2地区しかない）の行政長がそれぞれスピーチをし、事故処理作業者たちに感謝状と花などを渡していましたが、これは事前に各団体から5名ずつの表彰者を選出させたのだとのこと。その後、歌やダンスなどの披露（文化会館で活動しているサークルの人たちが出演）があり、全部で1時間半ほどの催しでした。市長のスピーチの途中で、「我々事故処理作業者が入院しても、（本来無料のはずの）薬のひとつも無料では出ない！　国や大統領は何をしているのか！」と会場から声高に話し始めた人があり、これに対して市長は「市の予算と権限で対応できることはすべてやっている。それ以外のことは政府や大統領に言ってくれ」ときっぱり回答していましたが、催しの後、市長を囲んで追求を続けている人も何人かありました。しかし、ドンチェヴァ氏によれば、これまでの市長に比べ、現市長はこのような催しに自ら出席し、問いかけに答えているだけでもまだましだということです。　（1月31日）

「菜の花便り」その５

昨年、N タマとしてチェル救の仕事を経験した山田さんが、パートナーのまちこさんとともに、若い感覚でホームページをリニューアルしてくれました。もうご覧になりましたか？ウクライナの国旗と菜の花プロジェクトをイメージした、やさしいトップページ。（そのページとは裏腹に、いま事務局では【粉骨砕身】とはちょっとオーバーですが、プロジェクトを軌道に乗せるため、河田さんが苦心惨憺の毎日のわけですが）このリニューアルされた HP は、見てくださった方たちにプロジェクトの進捗状況や現地の様子を理解していただくとともに、ナロジチの人々へのメッセージが届く場としたいと考えています。勿論、クリスマスカードやミルクキャンペーンの情報も、ポレーシェではお伝えできないカラー写真を添えてお伝えしようと予定しています。リアルタイムとはいきませんが、山田夫妻と一緒に皆様の支援が目に見える HP になるよう努力しますので、アクセスしてくださいね。（榎本）

ガリーナA.タビノヴァさんの死を悼んで

タビノヴァさん・・・

私たちがあなたにお会いする時、貴方はいつも物静かな笑顔で接してくださいました。ご自身もチェルノブイリの病魔と闘いながら、多くの仲間を長い間支援してこられたことを、誰も忘れることはないでしょう。22 年前のチェルノブイリ事故が無かったら、私たちが貴方に出会うことはなかったでしょうが、貴方に出会ったことで私たちは多くの事を学びました。笑顔の裏にどのような苦しみがあったか、私たちはただ想像するのみですが、貴方のこうした生き方に人間の誠実や尊厳とは何か、を考えさせられました。ご病気が進み命のともし火が消える最後まで毅然とした生き方だったと伺い、改めて貴方への尊敬の念を思い起こします。

長かった戦いもやっと終わりました。これからはどうぞ安らかにお休みください。

遠い日本からお祈り申し上げます。

2008 年 1 月 28 日　「チェルノブイリ救援・中部」の仲間達より

タビノヴァさんは、事故処理作業者の団体「リクヴィダートル」基金の代表者でした。それ以前には、「チェルノブイリの障害者支援基金」でも長く活躍されてきました。保健所の看護師だった彼女は、事故当時には民間防衛隊として放射能汚染地で事故処理作業に従事し、その影響による病気や健康不安と戦いながらも、他の仲間の救済に多大な努力をされてきました。この 1 年ほどは、胃癌が見つかり化学療法を受けていましたが、ついに刀折れ矢尽き…人生を閉じられました。被災者団体の活動について、お話を聞かせていただいた折、「国の支援も不十分で、またキエフの国会の前で座り込みをするしかない」と語られ、静かな中にも芯の強さを秘めた姿が思い出されます。（戸村）

＜在りし日のタビノヴァさん
（事故処理作業者証明書を手に）＞

事務局便り

2008年がスタートしてまもなく、事故処理作業者で闘病中の「リクヴィダートル」元代表のガリーナ・タビノヴァさんからメッセージカードが届いた。

「尊敬する友人の皆さん！　新しい年、2008年のお慶びを心より申し上げます！　皆さんがご健康、長きにわたる幸福、平穏無事、楽観主義と明日への確信、すべての人生の計画と意図の実現、豊かさに恵まれますよう、衷心よりお祈り申し上げます。新たな年が皆さんと皆さんのご家族、近しい方々に、ご成功と喜び、幸運のみをもたらしますように。G. タビノヴァ」（訳：竹内高明）

―その翌週、彼女は亡くなった。厳しい闘病生活の中で、自らにも言い聞かせていたのだろうか？「楽観主義と明日への確信」…知性と品位と節度、そして強い意志を持つ方だった。心からご冥福をお祈りする。

2008年、チェル救は「菜の花プロ」の正念場？を迎える。何が起きるかわからないウクライナ。待ち受けているのはいくつものハードルか。

現地との深い共通理解、そして多くの方の支援が頼みの綱。**乞！熱列支援。**　（山盛）

緊急!!　【会計担当者の募集】

昨年12月をもって会計の綾部さんが辞められました。急遽、運営委員の榎本さんが3ヶ月間限定で会計業務を引き受けてくださいましたが、その後の会計担当者はまだ決まっていません。

どなたか、是非、チェル救の会計担当を引き受けてください!!　以下、募集条件です。

1）チェルノブイリ救援・中部やNGOの活動への関心と意欲のある方。
2）就労日・時間：月・水・金 10時～17時
（早番10時～15時、遅番12時～17時の交代制）
3）時給：1,000円
4）仕事内容：事務局の会計（パソコンによる会計処理）とそれに伴う業務担当。
他、月に一度の運営委員会に出席のこと。（事務局員は他2名です）

編集後記

☆自分のからだで一ヵ所だけ変えることができるなら、迷わず私は身長をプラス5cmに。家でも職場でも、あと5cmあったらあっちもこっちも手が届くのに。仕方ないから脚立を購入。（佳）

☆原油の高騰で、スタツア参加者に大被害！　前回に比べ費用が3～4万円値上がりしている。飛行距離が長いためだけでなく、「燃油」という項目で費用が加算される。ウクライナ国内の滞在費は、全体の1/4程度だというのに…。さて、スタツア貯金を始めようかなぁ。（美）

☆映画「ひまわり」の、見渡すかぎりのひまわり畑は、ウクライナの田舎だったよね。今度は、ナロジチ地区を中心にかの大地は、菜の花の黄色に彩られる日がやってくるよ。（京）

☆人は、「9.11テロ」の疑惑について、「新聞も、テレビも、評論家も、国会も、何も言わない。だから、私は信じない。」と言う。しかし、その一つが崩れた。先日の国会で、「補給支援特措法」に関して質問に立った、民主党の藤田幸久議員がこの疑惑を追及した。その様子がインターネットで反響を呼んでいる。あなたの目は、耳は、頭脳はいつ目覚めるのだろうか？（J）

〒456―0022　名古屋市熱田区波寄町　20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX　（052）871―9473